

第4回京都市政策・施策評価制度検討委員会議事要旨(平成14年度)

日時:平成14年12月6日(金曜日)10:00~11:30

場所:京都ロイヤルホテル2階翠峰の間

[出席者](#)

1. 開会

2. あいさつ

3. 議事

【村松委員長】

- ・ 前回までに皆さまから色々な意見をいただき、それを踏まえて事務局に中間報告(案)をまとめていただいた。
- ・ 今回は中間報告(案)について意見をいただき、中間報告の原案をまとめて決定し、パブリックコメントに出す。
- ・ 中間報告(案)について、まず文案はこれで良いか議論いただき、その後、評価指標については、この政策や施策でこの指標で良いか、あるいはもっと適切なものが例示できないかといったことをできるだけ良い指標でスタートする方が良いということで指摘いただきたい。

【事務局】

- ・ 中間報告(案)の文案説明(略)

【村松委員長】

- ・ 実質に関わることとして、事務事業評価との関係がわかっていないところがある。事務事業評価はどのようになっているのか、外部機関があるのか。
- ・ 例えば、ここで外部機関と書いているが、外部機関の役割が持つものは事務事業評価とも関係があると思う。行政当局の評価においてもその仕分けがあると思うが、その辺りの説明をお願いしたい。

【事務局】

- ・ 事務事業評価の外部機関は評価の点検を行う機関ではなく、自己評価したものに加えて、実際に評価そのものを行う機関である。外部機関がきちんと評価する機関として位置付けられている。

【村松委員長】

- ・ 外部機関が仮に作られた場合にどのような性格の違いが生じるのか。

【事務局】

- ・ 事務事業評価の外部機関については、評価そのものを行っていただく、政策評価の外部機関については、私どもが行った評価の方法についてコメントいただくということで、今は考えている。

【村松委員長】

- ・ 評価の導入の背景について、政策評価の仕組みが導入されると新たに行財政運営システムを構築することになる。
- ・ 「市政の推進に資すること」になっているが、政策と施策、事務事業とは違い、このレベルであれば基本的なところまで考えたいという視点が表現されていると思う。
- ・ 他方で予算査定、計画策定にも反映させるというところでは、かなりミクロ的に踏み込んでいるような印象もある。
- ・ 1番の行政評価導入の背景と2番の行政評価システムは目的ではなく、背景であり、直接評価の目的というのは、この役割のところに書いていると読めば良いということか。

【町田委員】

- ・ 用語について、例えば満足度調査であれば、市民の方が答えやすく負担に思わないような工夫がされており、非常に親しみ深く感じる。
- ・ 「政策・施策評価」という言葉について、「行政評価」という言葉とは意味合いが違うのかどうか。京都市がこれまでに出版している報告書などは「行政評価」という言葉が使われていると思うが、すごく堅いという気がしたのでその意味合いについて説明いただきたい。

【事務局】

- ・ 「行政評価システムとは」というところで、政策・施策評価と事務事業評価の二つをあわせて行政評価という組立てになっていることを説明しており、その説明を受け、それ以降はその中の政策・施策評価が果たす役割の説明に入っている。そこで行政評価と政策・施策評価とを分けている。

【町田委員】

- ・ 同じ意味合いで言葉が違うと捉えてよいのか。

【事務局】

- ・ 行政評価の一部が政策・施策評価ということだが、政策と施策を分けて書いているので、行政評価と政策評価と施策評価の三本立てになっているようでわかりづらいかもしれない。

【町田委員】

- ・ 政策・施策評価と具体的に示して、むしろわかりやすく示そうという意図があったようだが、それで良いのか。

【事務局】

- ・ 事務事業評価を含んでいるものが、行政評価なので少し分けた表現にしている。
- ・ ただ、市民の皆さまにお示しする段になると、対象が京都市基本計画のレベルで評価をしていただくわけで、広い意味で言えば、市政評価ということで良いのではないかと思うが、どうか。
- ・ 更に言えば、安らぎのある暮らし、華やぎのあるまちを目指す市政の評価ということでも良いと思う。市民の皆さまにわかっていたきたいタイトルで出せば良いと思っている。

【村松委員長】

- ・ 看板は、今お話があったように、市政評価制度としても良いのではないか。その中でも二つの評価を行っているということを意図的に説明して、その中の政策・施策の評価はこのように行おうとしているというように流していくということである。看板は市政評価の方がわかりやすい。

【町田委員】

- ・ 親しみを持つということが大前提だと思う。

【内藤委員】

- ・ 少し技術的な細かいことを申し上げるが、「施策の評価」の項目で、「指標評価」と「満足度評価」とが対になっているが、「統計数値に基づく客観的な評価」と「満足度意識に基づく主観的評価」という意味だったと思う。
- ・ 簡単な言葉を使って対語にされると混乱する。前後から理解できるが、参考までにどこかでその二つが対になっているということを文章の中でわかりやすく書いていただいた方が良いのではないかと思う。

【村松委員長】

- ・ 例えば満足度評価を「市民満足度評価」と書けば、その辺りがはっきりする。
- ・ 指標評価はどんな表現が適切か。

【内藤委員】

- ・ 「行政統計等に基づく」という表現になるのではないか。

【村松委員長】

- ・ 政策・施策は目標である。目標をどう指標で表現し、それを指標で評価するかということが、数値化されている場合とされていない場合があるが、できるだけ数値化することになっていると思うので、何か工夫はあるかもしれない。

【新川副委員長】

- ・ 市民満足度も数字としては出てくるので、統計的な指標であることは間違い無い。

【内藤委員】

- ・ 指標の分野では「数字として出てくるから統計的・・・」とは普通は言わないが、紛らわしければ主観的・客観的という分け方で表現するほうがいいだろう。文書には実際にそういう表現も出てきている。それに形容詞をつけて多少文章でわか

りやすくしていただければと思う。

【村松委員長】

・ 何か工夫の余地はありそうである。ここで全部について意見交換する時間もないので、検討を事務局と一緒にするので、お任せいただきたい。

【新川副委員長】

・ 市政評価、行政評価、政策・施策評価、事務事業評価について、いろいろ混乱があったので、例えば図形に示して、それぞれの仕組みを整理し参考図表のような形で付けていただけると有り難い。あわせて、そこに政策・施策評価はこういう手順で、外部評価もその中に入っているというような絵が描けるようであれば、大変わかりやすく有り難いと思うので、工夫いただければと思う。

・ 内容に関して、一点目は、アカウントビリティの問題が特に市民に対する説明責任の遂行の項目で記述されており、これは結構かと思うが、説明責任の充実の項目とをあわせて考えたときに、やはり市民の方々の声をどう生かすかというところまではなかなか踏み込めていない感じがしている。

・ 説明責任の遂行の項目ではとにかく公表するというところで説明責任を果たすということで止まっているが、説明責任の充実の項目の趣旨から言えば、公表した結果、市民の方々の声をどのように生かすかが次のステップとして問題になる気がするが、その辺りをシステムとして書き込むのは難しいかもしれないが、そのような配慮は必要なのではないかと考えている。

・ 説明責任について言えば、説明すればそれで良いということで済まされると少し困るといった危惧もあり、説明できなかったときにどうするのか、あるいはその説明に対してクレームが出たときにどう対応するのかを考えたときに、やはりそうした市民の参加ルートをこの評価の仕組みの中にどう用意しておくか、あるいは、そういう方向での検討をどう考えようとしているのか、中間報告なので明確なシステムに仕上げる必要はないが、そういう視点も必要なのではないかと考える。

・ 二点目は、外部の評価に関連して、外部の機関を設置することが望ましいということで、概ね三つの任務を書いておられ、これは結構だろうと思っているが、もう一つはこの政策・施策の評価システムが、将来にわたってこのままで良いかどうか、いわばシステム自体を誰がどこでどうチェックし、検討するのかということも少し必要なのではないか。

・ 特に定着した評価の手法がまだない状態では、ただ単に評価項目や内部評価のやり方などということ以上に、やはり評価システムをどうするのかという観点での検討が必要かもしれないと考えており、外部機関をせつかく設置されるのであれば、そうした機能もあって良いのではないかと思う。

・ 三点目は、評価結果の公表と活用ということであるが、特に活用のところで評価から政策立案へという流れは大変よくわかるが、実際どういうイメージでこの新しい政策立案にこの評価を生かしていくのかが具体的にはわからない。

・このままであると、政策・施策を立てた基本計画の立案作業をもう一度この評価を踏まえてやるというようなイメージしか出てこないことになる。そうではなくて、むしろ来年の施策の修正や調整などといったところにきちんと生きているというイメージを出した方が活用のイメージとしてより正確であり、こういう作業をすることの意味も大きいと考えていただけないかと思う。そうした観点で、この活用の仕方について、もう半分くらい踏み込んで書いても良いのではないかと考えており、工夫いただければと思う。

【村松委員長】

・今の発言について、二点目の仕組みについては、例えば3年後に仕組みを再検討するというようなことにすれば良いのではないかと思う。その機関がやっても良いと思うが、事務局に簡単にお答えいただきたい。

【事務局】

・まず一点目については、説明するばかりでなく、くみ上げもということだと思うが、当然、私どもからすれば色々くみ上げるチャンネルはあり、ただ、くみ上げる際にまずその前提となる私どもが行っていることを理解いただくことから、このような表現になっている。

・市民の声の反映について、市政全体では、例えば市長への手紙や3000人対象のアンケートなど色々なツールを持っている。このシステムの中での市民参加の仕組みとしては、市民の満足度調査そのものに市民が参加するという形で織り込んでいることと、外部機関を設置するという二つのことを事務局では考えている。それ以外にもこの制度の中にこういうものをということがあればご議論いただきたいと思う。

・二点目の外部機関については、三つを挙げているが、「制度の向上を図ることを目的として」と書いており、当面これでやったとしても、当然より良い制度にしていくためにご意見をいただくことは考えている。ただ、具体的にこのように議論いただいて、良いものにしていこうというときに、来年すぐに見直すといったようなことを書くことはどうかと思い、その柱書きに書いたということである。

・三点目の公表と活用については、毎年事業を実施し、その前に政策立案があるということで、毎年その年ごとにというイメージで私どもは考えていたが、確かにおっしゃるように一つ一つの計画ごとにと読みめるということであるなら、例えば「企画立案作業等における」というところに「毎年度の」などといった言葉を加えることにより、きっちりとそれぞれの作業に活かされていくということが言えるのではないかと思う。

・基本計画そのものの点検・見直しについては5年程度を目安と考えているが、そういう単位で基本計画の点検作業も別途、京都市が実施する予定をしている。

・活用について少し具体的に言うと、毎年の予算編成の基本方針を大きな観点で政策全般にわたるプライオリティも含めて立案しており、また、各局で局の毎年の仕事の企画推進計画といった年度ごとの政策の企画も行うので、そういったも

のに活用していくということ、もう少し具体的に記述することはできると思う。

【新川副委員長】

・ 毎年度の評価が公表されたところで、今回はパブリックコメントという格好で中間報告の意見をいただくが、積極的に市民の方々のご意見を毎年度の評価の公表に際して募集するような仕組みがあっても良いのではないかと考えている。一般的に市民の方々からのご意見は上がってくることもあるかもしれないが、やはりこの評価についての意見を是非いただきたいという募集の仕方があるのではないかと考えている。

・ 比較的やりやすいと思うのが、例えば既に市民参加については色々なプログラムをやっている中で、そういった中での各種懇談会、市民懇談会のような場面でこの評価の結果を使ってもらう。市民の方々が市政について議論をする場合の材料として、この評価結果を題材にするような仕組みができると有効に活用できるのではないかと考えている。そして市民の方々のご意見を積極的に取り入れられるのではないかと考えたがどうか。

【村松委員長】

・ 行政当局の体制の問題なので、またお考えいただくことだと思うが、外部機関を置いて行政機関が自己評価したものをチェックする仕組みになると、外部機関が何も言わないと要するにオーケーであるとお墨付きを出すこととなる。

・ 市政が毎年万々歳であるわけがないので、相当頑張って自己評価が行われるか、自己評価を矯正する仕組みが市役所の内部の仕組みとしてなければ、外部機関は大変だという感じもある。

・ 強化するというのは、人員をそこに使うということなので、京都市はリストラさえどんどんやろうとしているところへ更にやる価値があるかということが大きな問題になると思うが、評価という仕組みを導入するというのであれば、ただお飾りでするわけではなく、一生懸命評価を行い、その結果、無駄なものが浮き上がってきたり、あるいは政策の質が改善されると思う。

・ 確かによくなっていくという実感がなければ、おそらく内部的にも評価制度はもたないのではないかと考える。その辺りをどういった体制にするかをまた詰めて考えていただきたいということである。

・ 外部機関があってもチェックする仕組みになっていて、毎年、意見・要求・要請を何もしないということであれば、京都市は100点だと世間は受け取るので、外部機関の委員はそれで何か問題が起こらなければ良いが、やはり政策がうまくいっていないという意見が強くなったときに外部機関としては大変である。その辺りで評価制度を導入して外部機関を置くというときには、色々なことが起こるということで、内部的な体制も徐々にでも良いと思うのでお考えいただきたい。

・ 次に評価指標に移らせていただきたいので、簡単に説明をお願いしたい。

【事務局】

・ 政策を大きくくり、その横にその政策に関する施策を並べて施策ごとに指標

の例を考えている。

- ・ 検討中がまだあるが、この辺りの悩みどころとしては、施策全体の成果や状況をあらわすものということで、かなりアウトカム指標を追求した結果、どうしても見当たらないということである。
- ・ ある特定の事業の成果や結果をあらわすようなものではなく、もう少し大きな社会の様相をあらわすものをつかまえようとして、幾つか選定したが、そうすると施策をまたがって同じ指標が立ってしまう例もあり、なかなか見つからなくて検討中というところがある。
- ・ どのくらいまで砕いて指標としていくかということが事務局としては悩みどころであるので、ご意見をいただければと思う。

【村松委員長】

- ・ 政策・施策はこういった形でいくとなっているので、その指標がこれで適切かどうかということである。
- ・ 公表するものとして、できるだけ良いものがある方が良いということだが、気になるのは、中央も地方も住民のためになることを政策としてやって、中央と地方とでは分業がある。地方には自治があり、自前で一生懸命考えて実行するということになっているので、広く指標の例を挙げても良いとは思う。
- ・ 日本国家の京都市地域における一部を担っていくという面もあるので、例えば平均寿命に京都市行政がどれだけ貢献できるかを考えると、明らかに貢献していると思う。京都市は多分医者が多く、平均寿命は高くなっていると思うが、施策の目標として平均寿命と掲げられるのかと思い、指標評価の例を見ていたが、こういったものはどうなのか。
- ・ 京都市のみがやっているというほど厳格ではないとしても、主として京都市がやっているようなことで指標を掲げるべきか、それとも少し広めに考えることによって国の政策に対しても文句が言えるといった視点が重要か、その辺りがよく分からないているのだが、どうか。

【山岡委員】

- ・ 全世界の平均寿命について、シエラレオネの平均寿命が一番短いと思うが、沖縄県やハワイなど、食塩を使っていないところとそうでないところ、また油をどのように使っているかなど、食料との関連性がなく寿命だけ取り上げているので、指標にはなりにくいのではないか。
- ・ 死亡率などネガティブな指標が多い。見た目にもあまりよくないのではないかという気がする。

【村松委員長】

- ・ 死亡率の減少なら良いのではないか。これは肺がん死亡率を減らすという減少の意味なのではないか。

【事務局】

- ・ 当然減少であり、明るいことである。

【山岡委員】

- ・ 例えば、京都の特徴などをいうと、公衆浴場の減少率が他都市より少ないことなどを挙げると、やはり公衆衛生の向上ということで、何か特徴のあるものが京都にあれば、その指標を採用すれば良いという意味である。
- ・ 見た目が良い指標を洗い出していくことも必要ではないかと思う。健康施設なども多く、サウナの普及率などもあるでしょうし、それはネガティブではなく良い意味である。

【金井委員】

- ・ やはりまちが若返るということが大事だと思う。若い人が集まれば子どももたくさん生まれてくるわけで、出生率の問題もやはり一つの指標になるのではないか。
- ・ それと関連して、学童、特に小学校の子どもの数がどのようになっているかなどの年齢別の数をチェックしていく必要がある。

【村松委員長】

- ・ それは考えられるが、どの施策に該当するのか。

【新川副委員長】

- ・ 「子どもを安心して産み育てる」といったところの指標にぴったりなのではないか。

【山岡委員】

- ・ よく色々な統計などが出ているが、例えば、芦屋市が一番住みよいなどとよく出ている。世界一住みやすいまちなどの指標は一体どういったものを取っているのか。

【村松委員長】

- ・ 京都市は住みたいまちの1位に時々なっている。

【山岡委員】

- ・ それは恣意的に住みたいまちなので、客観的にはどうだろうか。

【内藤委員】

- ・ まさにそうで、「だれもがずっとくらし続けたいなすまい・まちづくり」というのは、市民が本当にそう感じているかどうかの問題である。一方、例えば住まいの延べ床面積、医療機関の数など客観指標がたくさんある。ところが、それと感覚は違うのではないかということが毎回出てくる。実はこここのところが、主観指標と客観指標との違いです。ここでは意識として「あなたはくらし続けたいか」と聞くことが自然だと思う。
- ・ 延べ床面積、町内会活動や地蔵盆があるかなど、多分コミュニティに関すること、それから車があまり入ってこないなど、「くらし続けたい」という意識の要素には色々なことが効いてくるはずであり、勝手に選んだ特定の客観データだけで「くらし続けたい」指標だと言った場合は、私たちの感覚とは違う、ということが出てくる。

- ・意識をまず調査し、それがどこからきているかなど、もう少し地域ごとに掘り下げて、初めて施策につながるのではないかと思う。

【村松委員長】

- ・今の指摘は第1回の調査をなさるときに、全体としてあまり恣意的にならないように5段階にするなどが良いと申し上げたが、非常に住みたいかという質問をして、非常に住みたい人の理由を聞く、不満を聞くということは出発点のときに丹念にすると良いかもしれない。

【内藤委員】

- ・まさに意識調査は大体そういう設計が多い。

【山岡委員】

- ・理想的なまちづくりということで色々な討議をしたときに、実験都市で一つは整備された都市群が南にあり、非常にごちゃごちゃした法善寺横丁のようなものが北にあって、理想的には南だが、住みやすいまちは北になっている。

- ・指標と現実のイメージがそもそも違うので、そう言うと話が混乱するが、例えば、「住吉の長屋」のように安藤さんがつくったような住居は理想的だけ傘をさして行くということになるし、ファッションショーで1等になるようなものを着たいかというそうではない。だから目的の指標の置き方をどのようにするかについても考えないといけない。

【村松委員長】

- ・今までにも京都市はたくさんの意識調査をしているが、それをどこかに委託し充実した分析をして、京都市民が京都市をどう考えてきたのか、満足度はどういう構造になっているのか、不満の構造はどうなっているのかということを研究して、本にしてもいいのではないかと。十分なデータがあるのではないかと思うので、率直にやってみると面白いと思う。

- ・京都市民は割と京都のことを書いているものを買うので、それで普及させて、自分でも考えてもらうといったことができるのではないかと。第1回の調査で、ここに集まった人が義務感を感じてやるというのも良いのではないかと。

【木田委員】

- ・指標は定量的な調査、あるいは検討になると伺っている。個々の指標を評価して、更にそれぞれの指標の評価を総合的に勘案するとあるが、これは何か全体を定量的に評価する技術、ないしは方式といったものが準備されているのか。

- ・例えば、「住みよい都市」といったことを考えるとき、低所得の人が少ない方が絶対住みよいに決まっているが、平均所得や所得改善など経済的視点は全然ないが、これは必要ないのか。

【事務局】

- ・総合的に勘案するということについて、複数の指標があった場合、寄与度がどれくらいかということは私どもではわかりかねるので、それを何割加重するなどというようなことは少し難しいと思われる。

- ・京都市がやっていることに絞るべきかどうかについては、どれだけ貢献しているのかということもわからないので、色々なものを取りあえず出してみ、それから姿を把握していきたいと思っているが、果たしてそういった方向で良いのかどうかは、まさに委員の皆さまに意見を伺いたいところである。
- ・委員長の満足度調査でのご意見で、理由も聞いてみてはどうかということについて、幾つも聞くと量的に結構なものになり、理由まで聞くと、回答率が悪くなるのではないかと思っているが、その辺りはどうか。

【村松委員長】

- ・京都市民意識調査を1300人対象に679の有効サンプルを得て分析したことがある。京都市の問題は何かという1項目を入れたが、それに対する情報が誠に多く、一度はやる価値があるという感じがする。
- ・経費やタイミングなど色々考えてご検討いただければ良いのではないか。例えば私も一部お金を出して、オムニバスと一緒に調査し、それを私も利用するというのであれば、それでも良いと思う。

【内藤委員】

- ・全国の自治体のアンケート調査をたくさん行ったが、設計さえうまくすれば、量はそれほどネックにはならない。当たり前で面白くないものであれば嫌がるが、特に京都の人などはレベルが高いため、よく設計されていればついてくると思う。

【村松委員長】

- ・何かに役立つ、影響力を持つと思うところがあり、市がやると、有効サンプルは多い。

【内藤委員】

- ・やってくれるのではないかというかすかな期待を持っている。
- ・オムニバスというのは最近はやっており、我々がアジェンダのフォーラムでやっているものも、色々な大学の先生がプロジェクトの場として自分の研究費を持って参加する。そうすると情報が多く集まるので、委員長のご意見でもあるように、私も場合によっては考えてみてもよい。

【村松委員長】

- ・パートナーシップである。

【内藤委員】

- ・まさにパートナーシップで、大学としてどこかをフィールドにして研究費を使うので、ならばここでやろうということは十分あり得ることである。

【村松委員長】

- ・京都市にはたくさんの大学があり、みんなが調査をしている。そこでうまく連携を作れば、非常に重層的な市民の調査ができる。
- ・評価以外でも利用してその評価とリンクすれば、いろいろなことがわかるということがあると思う。

【山岡委員】

- ・ 色々な産業のアンケート評価を行ったことがある。例えば、どんなお菓子が売れるのかといったことを行うと、京都の生和菓子のシェアは圧倒的である。全お菓子の中で15%である。
- ・ 京都が誇る工芸菓子等があるので、そういった指標や評価、どういうものを誇っているかということ指標の中に入れれば、少し色づけができるのではないかという気もする。
- ・ そういった色々なアンケートで、サンプルをとるとすぐに1000以上は集まる。

【新川副委員長】

- ・ 評価について、色々な指標があるので、なかなか「これは」というのは難しいと思う。
- ・ 客観指標は、とにかく色々な指標を今後も検討するということで考えるしかないと思っているが、ただし、選び方については、その指標がどういう考え方でここに出てきているのかについては、整理しておかなければ、どうしてこんな指標を選んだのか、たまたまこれなら良さそうだと直感的に思ったではやはり済まないことがあると思う。
- ・ それぞれの施策分野を考えていくときに、その分野での様々な成果を直接であれ、間接であれ、よく示しているということが多分この客観指標の大きな根拠だと思うが、ただし、その時の示し方は、例えば、市の行政として行った結果がそのままストレートに出るものと、市民の皆さん、あるいは企業の活動等をあわせて考えないと結果が出てこないようなものもあると思う。指標の持つ意味合いとして、これはどちらかといえば行政の結果、これは市民の皆さま方の成果というような仕分け方も一つの整理の仕方としてあり、そういう性質がはっきりした上で指標として使えば、それはご理解いただけるのではないかと思う。
- ・ 指標の使い方、使われ方について、目標の立つような指標と、目標値ではないが、とにかくその数値を維持した方が良い場合、あるいは、その変化を見ていく中で、その施策の打ち方を変えていくといったことが出てくるものなど、色々なタイプのもが出てくるような気がしており、どれをとっても構わないと思うが、少し類型化して説明ができる方が良いのではないかと思った。
- ・ 指標の一つとして、例えば、事務事業評価の結果がこういう指標の中に入ってくるようなものがあれば、これも使えるのではないかと考えており、検討いただければと思う。

【村松委員長】

- ・ 最後の点は、ものによっては事務事業評価の指標と重複して使っても良いかもしれないという感じはある。
- ・ 数字の性格を見て、両方で使っても良いかもしれないし、まとめて使っても良いかもしれないので、その辺りは堅く考えなくても良いのではないかという感じはする。
- ・ 事務事業も政策・施策の中のものであり、革新的な事務事業であれば、政策

に直結している可能性もあるのではないか。このことについて、今のご意見を参考にさせていただくということをお願いしたい。

【金井委員】

- ・ 京都市内に高層マンションがどんどん建っていくということは、例えば、京都市でも何棟建つ、その中にどういう人たちが入るのかということは把握していると思うが、京都は高齢者にとって将来の終の棲家に良いということで、高齢者がそのマンションに入っておられるのか、あるいは、若い人たちがどんどん入ってきているのか。
- ・ 先ほど芦屋の話が出たが、震災後、立派なお屋敷が全半壊するなどして、その跡に大きなマンションがどんどん建っている。そこには若いカップルがたくさん入ってきており、以前よりも人口が増えているということがある。
- ・ 京都にどんどん高層マンションが増え、どのくらいの年齢層の人が入ってきているのか、若い人たちが入ってくるのであれば、その魅力、高齢者の人たちが増えてくるようであれば、何か満足につながる魅力があるのではないかと思う。
- ・ 将来の人口構成を捉えることは大切で、福祉施策などにも必要ではないかと思う。

【山岡委員】

- ・ 住みやすいまちということで、100年間の京都市の温度や湿度を調べてみた。夏は随分涼しくなってきたり、冬は随分暖かくなってきたりしているが、住みやすくなってきたのは京都だけなのかどうか。例えば、夏の熱帯夜は昭和30、40年代にずっと続いたことがあるが、つい最近、熱帯夜が少しの間続いただけであり、随分夏は涼しくなっている。京都の夏は蒸し暑く、冬はとても寒いなど色々言われるが、これはメトロポリタンは情報伝達の起点なのでどこでもそう言われるわけであり、本当は京都より亀岡が寒く、高知も盆地で涼しい。湿度も京都は高いといわれているが、パリや大阪の方が京都より湿度が高い。他都市との気象関係を見ても、京都は非常に優位な面が出ている。住みやすいところを評するのであれば、世界の湿度や温度変化を調べれば、その面においても京都は住みやすいということを実証できるのではないかと思う。

【村松委員長】

- ・ 今の発言の中にも指標化を目指して集める情報や方向があると思う。この辺りは少し考えていただくほうが良いのではないかと思う。
- ・ それと先ほど所得についての発言があったが、低所得者は要らないという言い方はなかなかしないものであると思うが、所得や担税力、税徴収率など、そういった世界があるが、どこに入ることになるのか。安らぎ、華やぎを支えるものになる。市民の参加というところにはそのような側面も少し入っている。そういうところは目標値に書きにくいかもしれないが、何か可能性はないかといったことを感じる。

【事務局】

・ どれだけの京都市にかかわる指標があるかということ自体、色々洗い出さなければいけないと感じているが、それぞれの施策がはっきりと目標として掲げられる指標と、そういう目標としての指標がなくても、その施策に関わると考えられる参考指標といったもの、目標としての指標だけでなく、参考というのもあっても良いかもしれないと思う。

【村松委員長】

・ 市民意見募集、いわゆるパブリックコメントについて、実施要領を説明いただき、これで良いかということをお諮りしたいので、まず説明をお願いしたい。

【事務局】

・ 資料2に市民意見募集の実施ということで、期間や方法、冊子を作ること等の実施概要を書いている。

・ 表紙を検討いただいた内容そのものに付け、裏表紙に意見募集の要項や切り取れば葉書になるようにし、また、そのままファックスでも送っていただけるように、あるいはメールアドレスを掲載し電子メールでも応募できるように、様々な方法で意見応募ができるといったイメージを持っていただけるかと思う。

・ 1か月間ぐらいで実施させていただくということを考えている。

【村松委員長】

・ 内藤委員、このような方法でうまく市民意見の募集ができるものか。

【内藤委員】

・ 考えられる限りベストに近いのではと思うが、お尋ねする情報は、中間報告をそのまま見せて、これについての意見を募るということだと思うがどうか。

【事務局】

・ はい。文章で少し長くなるが、背景から役割などの内容を書いており、指標そのものもやはり見ていただいた方が良いと思う。

【内藤委員】

・ 一番期待しているのはどの部分か。こういうことを実施すること自身がどうかということか、実施するのは良いが基本的な考え方がどうなのかということか、それとも最終的にこういう項目についてはもっとこんなものがあると思うということか、三つぐらいに分けると全部か。

【事務局】

・ やはり関心の向く方向もあろうかと思うので、制度そのものだけを聞くとなかなか意見が出てこない。

【内藤委員】

・ それはそうであり、かなり高度な話になる。そうになると、個別の指標の項目でどうかと聞くのであれば、これを投げて、ご意見をと言われると意見が出てくるかどうか。

・ 多分色々なレベルの高い人も多いので、専門的にこういった指標であればこういう項目にきなさいという人もあるだろうが、非常にテクニカルな面があるので、

専門的な要素のあるものを投げて、意見をくださいと言われるのは、普通の取り方としては不親切という気がする。

・ だからといって、どのようにと問われると、本気で1年ぐらい研究でもさせていたただかないと難しいので、やむを得ないのではないか。

【山岡委員】

・ 特に聞きたいといった優先マークを付けておくということはある。

【内藤委員】

・ 一般市民からすれば、記述的に書けというのは一般には非常に難しく、書かれても分析が相当大変である。委員長が凄く情報があつたとおっしゃったのは、それは研究として本気で取り組まれたからで、機械的には処理できない。

【山岡委員】

・ 指標の検討中という部分はそのまま出すのか。

【事務局】

・ そのまま出すので、例えば検討中のものあり、それらに意見をくださいといったポイントで聞くということは考えられるかもしれない。

【内藤委員】

・ プロが思いつかずに検討中としているものについて、意見をくださいと言っても無理なのでは。

【山岡委員】

・ 一度やってみて、それで出てくることからまた考えれば良いのではないか。

【新川副委員長】

・ お聞きになりたいポイント、ここで議論になったポイントを一枚紙ぐらいにまとめられたらどうか。

・ 評価をしたいが、これについてどう考えているのか。それから評価の仕組みとして客観指標と市民の皆さんの意識調査に基づく満足度でやるが、こういうやり方はどうか。内部評価を行い、それから外から入ってもらって外部評価を実施するが、これはどうだろうかといった問いかけ方ができるようにする。いわばこの評価の仕組みの柱になるようなところを一枚紙でまず出して、それを中心にわかりにくいところは報告書を見てもらうといった格好にするなど、パブリックコメントを出されるときに工夫をされてはいかがか。

【事務局】

・ 「政策・施策評価導入の背景と概要」のところに少し問いかけを付けるといった形か。

【新川副委員長】

・ 問いかけと少し内容についての簡単な説明のようなものを、できればあまり細々と書かないで済むような、わかりやすく書くのは難しいが、基本的な枠組みや考え方に属するところを書けば良いのではないか。

【村松委員長】

- ・ 一体何を聞きたいのかということになるだろうから、こういう制度が導入されるので支援してください。今後もずっと見ていてくださいということのPRは一つあると思う。
- ・ 指標については、こういう指標があるという提案があれば良いだろうと思う。果たす役割は何だと言われてもなかなか出てこないと思う。

【内藤委員】

- ・ それは市民に聞くべきことではないと思う。
- ・ 色々なことを市民に問いかけるということが今の流れなので、それは悪いとは言わないが、その中でもコストパフォーマンスが一番悪いコメントを要求しているような気がする。私がアンケートを受けたら、とにかく第1回目はプロないし専門家と行政が本気でやるだけやってみて、一度やって答えを出して下さい。それについてなら、また言いようがあると個人的には答えるだろうと思う。水をかけるようであるが、非常に実りが少ないという気がしなくもない。

【山岡委員】

- ・ 例えば、ここに高齢者の人権尊重や障害者の人権尊重ということがあるが、市民として考えてみると、何を聞いているのかわかりにくい。京都市であれば市バス、地下鉄の中に高齢者の座席が全体の座席の何%あるかといったことを聞いてもいいが、これはそこへ何人若者が割り込んで座っているかを調べることも必要だ。人権ということ考えたときに、精神的な人権の尊重を満たすということと、物理的に高齢者優先のところはどこにいくつあるかを市民に聞いても難しい問題で、これらは専門家がやはりある程度決めて出さないと。しかし、逆に市民が何を言ってくるか、面白いということはあるが、どうか。

【村松委員長】

- ・ こういう制度をやるということはコメントに出し、それで指示と周知を求めるといふ仕組みだと思う。ただ、まだ一工夫あるかもしれない。

【事務局】

- ・ パブリックコメントというのは、およそ不特定多数の市民生活に影響を与えるため、それをすることが是か非かを含めて問いかける種類のものである。これからやっていく事柄の中身については、色々市民の方々にもアンケートなどをしていくことを考えると、パブリックコメントが絶対に必要というのはどうか。

【町田委員】

- ・ 知人で鴨川ベリをよく散歩する高齢者がいて、その方が鴨川の河畔にはベンチがあるが、背もたれがついているベンチが少ないと思い、市にそういうベンチを作ってくださいとお願いしたら、すぐに対応しますという返事があり、また具体的にこのように計画しているといった説明の返事があって、そのことをすごく喜んでおられた。自分の意見に返事をしてくださっていることが京都市政に見え、何か実施されたことそのものではなく、答えてくれたことを非常に喜んでおられた。何かそういうことが見えるようなものが増えた、こういうことでも考えてくれたという満足

感のようなものがこういう意見の場合は出てくるかもしれないと思う。

【村松委員長】

・ こういう制度があり、何か市民の満足度調査などもこれからやっていくということで、理解してくれた人からは嬉しいということでやってくださいといった反応がある可能性はある。

【内藤委員】

・ 実施することを広報やニュースで流していれば、こんなことも実施すると思っていたところに、突然自分のところにそういった意識調査が来るというのは良いが、実施すること自身を事前に意見募集するというのはどうなのか。

【村松委員長】

・ これを見ていて、やっていいですかと聞いているわけである。しかし、それは我々というか市がもうやることである。

【内藤委員】

・ やることは決まっており、アンケート調査をするわけなので、そこにもう少し力とお金をつぎ込まれた方が良いデータが集まるように思う。

【新川副委員長】

・ パブリックコメント自体の性質は、一般的に世論の動向を見定めるといったものではなく、重要な政策提案について、それについての利害や関心をお持ちの方々、あるいは市民レベルでの専門家の方々から意見をいただくといった性質も同時にある。

・ 単に答えにくいからということではなく、これ自身が市の重要な政策方針である以上、それについてステークホルダーたる市民からの意見をいただしておくことは、民主的な手続きとして当然だろうというような前提でパブリックコメントは行われていると理解している。

・ わかりにくからうが、なかろうが、もしも市民に開かれた市政を標榜するのであれば、やはりやらざるを得ない手順と考えることができると思う。

・ もちろん評価制度がそれほど重要な施策でないということであれば、また別であるが、おそらく非常に重い政策なので、やらざるを得ないのだろうと考えている。ただし、やり方としては、今話が出たように、このまま丸投げをしたときにわかりやすいと言っていたかどうかはわからない。

・ 一般的には、国のパブリックコメントもそうであるが、非常に専門的な難しい法案の骨子・要旨や法律案をそのまま丸投げしてパブリックコメントを求めるということもあるので、この辺りはそれほど京都市がバランスを失っているとは感じない。

【村松委員長】

・ 大体意見も伺ったと思うので、さらに工夫の余地があれば考えていただくが、とにかくパブリックコメントを実施するということで行きたいと思う。

・ 原案の中で少し検討が必要な箇所については私にお任せいただいて、事務局

と相談して検討する。

4. 閉会

【事務局】

- ・ 次回については、今申しましたような手続きを経て、第5回になりますが、2月21日に行います。

第4回京都市政策・施策評価制度検討委員会・出席者

村松岐夫(むらまつみちお)	京都大学大学院法学研究科教授
新川達郎(にいかわたつろう)	同志社大学大学院総合政策科学研究科教授
金井秀子(かないひでこ)	京都文教短期大学教授
木田喜代江(きだきよえ)	公認会計士
内藤正明(ないとうまさあき)	京都大学大学院工学研究科教授
町田玲子(まちだれいこ)	京都府立大学人間環境学部教授
山岡景一郎(やまおかけいいちろう)	京都府生活衛生同業組合協議会会長